

企画展 「風景を愛でる」 日下部一司

会 期：2023 年 1 月 28 日（土）～2 月 26 日（日）〈26 日間〉

会 場：美術工芸展示室

展示点数：106 点

観 覧 料：無料

入場者数：1,106 人



【内容】

美濃加茂市民ミュージアムでは、開館以来「芸術と自然」をテーマに現代美術家を招き、滞在制作の成果を発表する展覧会、市民と作家との交流の場を提供するワークショップなどを開催してきました。今年度は岐阜県郡上市の出身で、現在は関西を拠点に活躍する美術家・日下部一司（くさかべ かずし、1953 年～）を紹介しました。

作家は 1976 年に大阪芸術大学美術学科版画専攻を卒業し、版画やインスタレーション、既製品を用いたオブジェなど多様な手法によって、既にある物や風景についての認識を問う表現を続けてきました。近年は、風景を独特の視点で捉えた写真作品を制作しています。

日下部が目を留める風景は、町中や里山などの人々が生活している場の中に在ります。一見すると見過ごしてしまいそうな光景に抽象的な形態、形や線の関係性、力の均衡などを見出して、風景を切り取ります。そして「雑巾がけ」と呼ばれる古い彩色方法で作品に仕上げています。太い線に縁どられたセピア調の写真は、近代日本の古写真を想起させます。

身の回りにある風景の面白さを提起しながらも、時空を超えた不思議な空気感を漂わせ、観る者を惹きつけます。この展覧会のために作家は 2022 年 8 月に美濃加茂市民ミュージアムを訪れ、アトリエ棟に宿泊滞在しながら美濃加茂市内を歩き回り、撮影に取り組みました。今回の展覧会ではそれらの新作 21 点を含め 106 点の作品を展示しました。

【関連事業】

□ワークショップ ピンホールカメラ

2 月 5 日（日） 10:00～16:00 工芸室 講師：日下部一司氏 参加者：9 人

□アーティストトーク（作家による展示解説）

2 月 12 日（日） 13:30～15:00 研修室 講師：日下部一司氏 参加者：40 人

【刊行物】

『風景を愛でる 日下部一司 記録集』 B5 判 8 頁

【展示品】

No.	作品名	制作年	No.	作品名	制作年
1	海石榴	2022	4	猿沢池に居る	2022
2	点を繋ぐ	2021	5	風景をなぞる	2021
3	noise	2021	6	近景・遠景	2021

7	平面張力	2022	49	空模様	2021
8	二辺の風景	2022	50	直線を拾う	2021
9	2 辺の風景	2022	51	隙間の風景・B	2021
10	屋根を臨む	2021	52	四つの光	2021
11	斜面にある垂線・B	2022	53	斜面にある垂線・A	2022
12	相似形風景	2021	54	影の重力	2022
13	余白の文字	2022	55	二輪	2021
14	境界線	2022	56	中心を探る	2021
15	鯉の三角	2022	57	Spotlight	2022
16	一方通行	2022	58	琵琶湖畔	2021
17	角度と風景	2022	59	division	2021
18	松の垂直	2021	60	humidity	2021
19	三つのフレーム	2022	61	接点	2021
20	量感風景	2022	62	矩形感覚	2021
21	柳の風景	2022	63	空を映す	2021
22	風景を捉える・2	2021	64	水平軸	2021
23	稜線を隠す	2022	65	点灯花	2022
24	終わり、そして始まり。	2022	66	稜線を繋げる	2021
25	七本目の線	2022	67	青松落色	2021
26	Scene	2022	68	矩形に沿う	2021
27	単位	2021	69	淀屋風景	2022
28	影盆栽	2021	70	対角線の風景	2021
29	木の葉の輪郭	2022	71	Horizon	2021
30	四つの余白	2021	72	接点風景	2022
31	Silhouette	2021	73	形態をまねる	2021
32	雨月花	2022	74	矩形をなぞる	2021
33	そこにあった	2021	75	対の風景	2022
34	矩形を探る	2022	76	余白を見つける	2022
35	One quarter	2022	77	こっちの風景・向こうの風景	2021
36	相対するかたち	2022	78	余白をつくる	2022
37	飛行機が飛んだ	2022	79	坂道の始まり	2022
38	丘	2021	80	二つの余白	2022
39	花を活ける	2022	81	Dots	2022
40	遠くへ・近くへ	2022	82	風が吹いた	2021
41	雲の輪郭	2021	83	直線を見つける	2021
42	NP-15	2021	84	稲穂風景	2022
43	Shilhouette/Nara	2021	85	空間概念	2022
44	余白を運ぶ	2022	86	矩形に収める	2022
45	垂直を感じる	2021	87	3 本の杭	2021
46	花を見る	2021	88	余白を埋める	2022
47	境界線の眺め・A	2022	89	空間を割る	2021
48	境界線の眺め・B	2022	90	隙間の風景・A	2021

91	点を打つ	2022	99	森を見る	2022
92	「空模様」	2021	100	斜軸	2022
93	重力を量る	2022	101	接点を見つめる	2022
94	水平線	2022	102	風景が重なる	2022
95	眼下の風景	2022	103	輪郭と距離	2022
96	重力から逃れる	2022	104	零れ陽	2022
97	二つの風景	2022	105	ふたつ	2022
98	木を見る	2022	106	小さなカーブ	2022

上記の 106 点とも

技法：バライタ紙にゼラチンシルバープリント・油性絵具

サイズ：380×280mm

*79、81、84～86、88、91、93～106 は美濃加茂で撮影

【参考】

作家は 2022 年 8 月 23 日～27 日の間、当館のアトリエ棟に滞在して制作に臨んだ。日下部氏にとって美濃加茂での撮影は初の試みであったが、普段の制作と同じように足で歩き、様々な風景を見つけて作品化した。美濃加茂で撮影した写真の作品群は、展示室の中央に立つ壁面に集めるようにして展示した。文化の森から歩いて行ける場所にも撮影地があるため、「どこかで見たことがある」「この場所は分かる」といった来館者の声をしばしば聞くことができた。

作家は大きなカラー写真の作品も制作しているが、今回の展示では雑巾がけによる手彩色の同形の作品に絞った。そのため、来場者は歩きながら自分の目に留まる風景の前に立ち止まるように鑑賞していた。作品内容と展示手法が相まって、身近な場所にも美術が在るということ、自分の視点で「風景」を見出していく面白さを伝えてくれる展覧会となった。

会期中の配布資料として、作家のステイトメントの他、制作の様子を日々綴った日下部氏のブログの文章を転載した。美濃加茂での制作の様子が生き生きと伝わる文章であったためである。会期中の週末には作家が来館していたため、来場者と作家が会場で歓談する和やかな様子がよく見られた。

会期中には、菓子などの空き缶を使ってピンホールカメラを制作し、森で撮影したフィルムを暗室で現像するという一連の工程を追体験できるワークショップを行った。モノクロ写真を撮影と現像を楽しみ、最後に互いの作品を鑑賞しあう時間も持つことができた。



〔展示室 中央の壁面に美濃加茂で撮影した作品を展示〕



〔ワークショップ 現像の様子〕

【アンケート結果】（全 55 枚・複数回答あり）

選択設問から

① 展示を見て今の気分は

- ・心が安らいだ 13
- ・心がざわざわした 1
- ・心が躍った 3
- ・力強さを感じた 1
- ・美しいと感じた 11
- ・驚いた 2
- ・怖いと感じた 0
- ・不思議な世界だ 14
- ・悲しくなった 0
- ・わけがわからなかった 2
- ・ずっと見ていたい 6
- ・見なくても良かった 0
- ・その他 2

計 55

② 展示を見て思ったこと

- ・こういう表現があるんだ 15
- ・作家の発想は豊かだ 15
- ・とても気になる作品があった 7
- ・作家のことを知りたくなった 7
- ・作家の意図するものがほとんどわからない 1
- ・素材や作り方に興味を持った 10
- ・特異な空間を楽しめた 8
- ・自分の考え方には合わないと感じた 1
- ・自分の固定概念が崩れた 4
- ・スケール感に圧倒された 0
- ・その他 0

計 70

③ 発想・発展

- ・日ごろの色々な事を忘れることができた 3
- ・自然のことを考えた 5
- ・誰かに話したくなった 4
- ・思い出すような体の感覚があった 9
- ・自分の日常について思いをはせた 6
- ・作品から何かを連想した 6
- ・思い出す情景や事柄があった 12
- ・美術への関心が高まった 6
- ・時事的なことに思いをはせた 1
- ・何かを作ったり、表現したくなった 4
- ・もう一度見たいと思った 7
- ・作家の他の作品も見たいと思った 10
- ・撮影場所を知りたいと思った 5
- ・現地に行ってみたいと思った 1
- ・その他 1

計 80

自由記述から

・視力の落ちた高齢者には、作品・題名を観ることに苦勞をいたし、作品集を買って、後日もう一度御邪魔することと致しました。
・作品を見ている中で、ある作品には、「〇〇・A」「〇〇・B」という作品名があり、ある場所には隣どうしで展示されている作品があれば、片方だけの作品（「〇〇・A」だけ、「〇〇・B」だけ、）を展示されていて、もう片方の作品を展示しなかった意図が知りたいと私は思った。

・ほとんどの作品は目で見て、作品名から理解できる作品があったが、一部の作品では作品名から発想を膨らませる作品があり、その作品について友人と先生と話し合う活動が非常に楽しかった。

例・「noise」No.3 私：「noise」は日本語で「騒ぐ」という意味があることから、夏の日「快晴」から夏の風物詩である「せみの声」や「扇風機の音」「風鈴の音」などの音が響きわたる時期であることから作品名に「noise」がつけられたのかなど私は思った。

・友人：窓枠から見た景色だと思った。

例・「形態をまねる」No.73 木をまねようと雲が時間をかけて形を変えていく様子を写真におさめたのではないかと私は考えた。〈気になる点〉・空模様という作品が二つあるのですが、なぜもう一つの作品に「」をつけたのか気がになりました。

・これは、あくまで私の予想ですが、隙間の風景という作品がA・Bで作品の位置がはなれているのは作品同士の隙間をうめるという意味なのではないかと思った。白と黒の世界ですてきだなと感じた。その中でも濃さがそれぞれあって、ちょうどいいバランスになっているのだと思う。

・なるほど と思いました。スーッと入れました。

・展示が美しい。写真と絵画を行ったり来たりする感覚が心地よかったです。

・日常の風景を自分はどう見ているのだろうかと思いました。近い所に視点を合わせるか遠くか、とか…。小さい画面だからこそ集中して訴え（作者の視点）を考え、感じられるのかもしれないとも思いました。

・製作風景や、本人の写真がほしかった。

・初めて見ました。とても面白かったです。

・モノクロの写真というのは、とてもなつかしいような気分させてくれるものですね。ひとつひとつの切りとり方が、個性的な表現だと感じました。心いやされる写真でした。

・自分も日常や散歩の時など写真を撮っているのですが、構図とかもう少し考えてみようと思った。

・とても、不思議な感じでいやされました。

・作品は人そのものな感じとしみじみ感じ入りました

・サイズが小さく老人には見にくい。サイズが半切位のが観たかった。

・いそぎ足でみていたので、本当は時間をかけてゆっくり見たかった。もったいないことをしました…。いつもステキな空間ありがとうございます。

収蔵品展とそのほか

【民具展示館・生活体験館】

□蚕とまゆ展

会 期：2022 年 4 月 23 日（土）～8 月 28 日（日） 〈110 日間〉

会 場：民具展示館、生活体験館

展示点数：約 40 点

観 覧 料：無料

□ていねいな暮らしと道具展

会 期：2022 年 9 月 10 日（土）～2023 年 3 月 12 日（日） 〈130 日間〉

会 場：民具展示館

展示点数：約 40 点

観 覧 料：無料

【美術工芸展示室】

□収蔵品展 大矢峻嶺と河合米田

会 期：2022 年 5 月 14 日（土）～6 月 5 日（日） 〈20 日間〉

展示点数：8 点

観 覧 料：無料

【展示品リスト】

No.	作家名	作品名	材質技法	制作年
1	河合米田	雪窓詩思	絹本墨画淡彩	
2	河合米田	水墨南画 山水図屏風	紙本墨画淡彩	1924 年
3	大矢峻嶺	美人画	絹本着色	
4	大矢峻嶺	雀図	絹本着色	1937 年
5	大矢峻嶺	竹内栖鳳	絹本着色	
6	大矢峻嶺	牡丹に猫	絹本着色	
7	大矢峻嶺	四季花鳥図	紙本着色	1950 年代後半
8	梶浦逸外、大矢峻嶺、河合米田	寄せ書き 寒山拾得	紙本墨画淡彩	

□初夏の収蔵品展 ―美濃加茂市ゆかりの作家たち―

会 期：2022 年 6 月 23 日（木）～7 月 10 日（日） 〈16 日間〉

展示点数：12 点

観 覧 料：無料

【展示品リスト】

No.	作家名	作品名	材質技法	制作年
1	渡辺 浩	茶房	紙本着色	1976（昭和 51）年
2	坂井範一	金華山	油彩、画布	
3	坂井範一	三重塔	油彩、画布	
4	坂井範一	長良橋	油彩、画布	1965～70（昭和 40～45）年
5	小林文一	赫陽	陶	1996（平成 8）年

6	小林文一	蒼陰	陶	1993（平成 5）年
7	渡辺 綾	夏の日	紙本着色	1995（平成 7）年
8	長谷川三佐男	港の朝	水彩、紙	
9	長谷川三佐男	すいれん池	水彩、紙	
10	長谷川三佐男	河口の夕映え	水彩、紙	
11	大矢峻嶺	風景（小下絵）	紙、墨、鉛筆、色鉛筆	
12	大矢峻嶺	天龍寺の朝（小下絵）	紙、墨、鉛筆、色鉛筆	1930（昭和 5）年

□冬の収蔵品展 日本の木版画

会 期：2022 年 12 月 18 日（土）～2023 年 1 月 15 日（日） 〈14 日間〉

展示点数：28 点

観 覧 料：無料

【展示品リスト】

No.	作家名	作品名	技法	制作年
1	三塩英春	目黒不動	木口木版	1998（平成 10）年
2	吉田亜世美	東京百景 神田川、井の頭辺り	木版	1997（平成 9）年
3	吉田遠志	東京百景 東京港野鳥公園	板目木版	1990（平成 2）年
4	古賀 章	東京百景 風景（Tokyo Tower）	多色摺木版	1998（平成 10）年
5	川西祐三郎	東京百景 両国国技館	多色摺木版	1995（平成 7）年
6	川西 英	船室 B	木版	1958（昭和 33）年
7	畦地梅太郎	山男 五	木版	1956（昭和 31）年
8	品川 工	小さな独裁者	木版	1956（昭和 31）年
9	萩原英雄	石の花 赤	木版	1960（昭和 35）年
10	黒崎 彰	闇のコンポジション A	木版	1970（昭和 45）年
11	野田哲也	Diary : Feb15th '82' in Iwaki	木版、シルクスクリーン	1982（昭和 57）年
12	柄澤 斎	肖像 XXVIII ルドン	木口木版	1985（昭和 60）年
13	小野忠重	野のほとけ	木版	1962（昭和 37）年
14	斎藤 清	会津の冬（51）	木版	1982（昭和 57）年
15	高橋力雄	平成富嶽三十六景 Mt. Fuji 25 時	木版	1991（平成 3）年
16	金森世士夫	平成富嶽三十六景 湖山〈水面の不二〉	木版	1991（平成 3）年
17	吹田文明	平成富嶽三十六景 夏	木版	1991（平成 3）年
18	小作青史	平成富嶽三十六景 煙り上がる	木版、リトグラフ	1992（平成 4）年
19	河内成幸	平成富嶽三十六景 多摩早春	木版	1992（平成 4）年
20	平塚運一	平成富嶽三十六景 甲州西ノ湖富士	木版	1992（平成 4）年
21	中山 正	平成富嶽三十六景 絵馬〈山麓疾走〉	木版	1993（平成 5）年
22	吉田千鶴子	平成富嶽三十六景 富岳錦秋	木版、亜鉛凸版	1993（平成 5）年
23	吉田穂高	平成富嶽三十六景 壁の中の富士	木版、ナイロン凸版	1993（平成 5）年
24	磯見輝夫	桜の頃	木版	1983（昭和 58）年
25	船坂芳助	White Space S7-1970	木版、穴、レリーフ	1970（昭和 45）年
26	船坂芳助	My Space and My Dimension-548	木版、シルクスクリーン	1978（昭和 53）年
27	堀江良一	弧のある風景 96-14	木版	1996（平成 8）年
28	堀江良一	弧のある風景 10-5	木版	2010（平成 22）年